

## 明確になってきたスマホ長時間接触による眼・視覚神経問題

### 急性内斜視問題をマスコミ各社が報道

6月14日朝日新聞朝刊に「スマホで内斜視？ 多発」の大見出しで本問題が取り上げられました。報道の切っ掛けは、14日に日本小児眼科学会と日本弱視斜視学会の合同学会総会が予定されており、そこで浜松医科大学研究グループの発表が組み込まれていたためです。NHKも関東地方のニュースで報道し、その後、新聞とテレビ各社の報道が続きました。TBSは朝の報道番組で20分近く特集を組みました。

朝日新聞は4月10日にも「乳幼児の斜視 視力発達に影響」の記事を紙面の半分ほどを割いて報道しています。これらを通してようやく、スマホ長時間利用と斜視（眼位異常）に相互関係があるという認識が形成される第一歩になりました。

学会報告では、症状を「急性後天共同性内斜視(AACE)」と銘々しています。学会報告の抄録を右に転載します。⇒

AACEは、過度な輻輳(より眼)の維持により、眼球を動かす内直筋が疲労し発生します。この症状は「スマホ使用をやめる」ことや「内直筋を緩める注射をする」等の治療で一定の回復が見込まれます。しかし、THInetの監修者である鈴木武敏博士や不二門尚博士等は、AACEのほか、外斜視・外斜位(隠れ外斜視)や調整輻輳機能異常、さらに片眼視等両眼視機能異常にもなっている症例をすでに発表しています。これは、眼の問題ではなく深刻な視覚神経ネットワークの問題です。関連の関係を示すデータを右に紹介します。

鈴木博士が、スマホによるより眼から両眼視機能異常に気づき、調査を開始したのが2012年。その研究成果を学会に発表したのが2014年です。今まで眼科医や眼科学会の方々も意識していなかった新症状です。博士が2017年に実施した私立高校生500人を対象とした調査結果が眼科関係学会で発表されれば、問題の深刻さがさらに鮮明になるでしょう。鈴木先生頑張ってください。

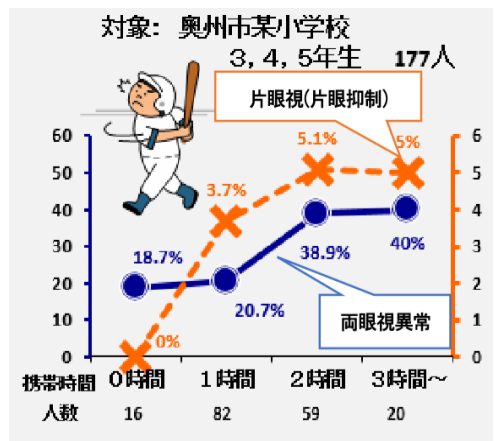
### AACEに関する全国調査

発表者・飯森宏仁・浜松医科大

方法⇒学会に所属する医師 1083 人にアンケート依頼。

結果⇒369名より回答。2018年1月から12月の間に、発症年齢が5から35歳のAACE患者を経験したと回答した医師は158人(42.8%)、そのうちデジタル端末の使用がAACE発症と関連すると思う症例があったと回答したのは122人(77.2%)であった。また、デジタル端末の使用を中止し症状が改善した症例を経験したと回答したのは37人であった。

### 鈴木武敏博士の調査データ



図表IV-7 小学生の携帯使用時間と片眼視と両眼視異常の割合  
出典：「スマホによる両眼視障害」鈴木武敏 子どものネット利用に関する問題全国研修会 2018.10.10

## 『スマホ・ネットの長時間接触による健康被害の実際と対策 ～ネットリスク啓発者と保護者のテキスト～』

**試行版 7月末完成 第1版 10月1日発刊予定**

THInet 内容教材開発委員会が、認定講習の教材づくりと一体化して進めてきたテキスト発刊の見通しがようやく立ちました。A4版90頁、価格は税込み1000円です。今回は、試行版として印刷し、それを関係者とともに再校正し、10月に第1版として発刊します。Webからの販売は第1版から10月からになります。自主出版で販売元は、WOOD&SUN COMPANYです。灯火7月号に、目次等の案内とMailでの予約受付を案内します。